

2016 年度卒業式 学長式辞

東日本大震災の発生から 6 年が経ちました。また、昨年の熊本地震で被災した東海大学では卒業式が行われ、犠牲となった学生にも卒業証書が贈られたというニュースに胸が熱くなりました。いずれも復興への道のりは長く続きますが、こうした困難を乗り越えて人間社会は成長します。被災地や被災された方々、犠牲となった方々に想いを馳せつつ、今年も無事に埼玉大学卒業式を迎えられたことを、皆さんとともに、何より幸せに感じたく思います。

私は今朝も普段と変わらず大学に立ち寄り、いつも通りのキャンパスを歩いてきました。桜のつぼみが、咲き誇れる日々を待ちわびるかのように膨らみ、ほころんで、その美しさを増しています。このように、春の装いが進み、希望に満ち溢れた今日の良き日、ここに埼玉大学卒業式を迎えられた 1,681 名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。埼玉大学長として、心からお祝いしたく思います。また、今日まで皆さんを支えてこられたご家族の方々に対しましても、深く敬意と祝意を表します。

皆さんは今、卒業の喜びと自信、そして新たな道への決意に満ちあふれ、とてもいい顔をしています。埼玉大学での充実した時間が皆さんを大きく成長させたのだと思います。ただ、私がそうであったように、別れの寂しさや、これからのことに対する不安などが少なからず入り混じって、気持ちは複雑なのではないでしょうか。今日は、皆さんの人生の中で一つの大きな節目です。この瞬間、その気持ちをいつまでも忘れずに、大事にして下さい。

人生は、とても不思議で面白いものです。その時々で様々な種類の節目の点があり、その点がつながって 1 本の線という、一人一人の人生になります。この節目の一つとして大きな存在になり得るものに出会いがあると思います。人との出会い、学問との出会い、ものごととの出会い。埼玉大学での学生生活を振り返っても、出会いの大切さが分かります。

このところ、学長として大変嬉しいことに、埼玉大学卒業生の活躍が数多く続いています。そして、どの活躍もみな、出会いの大切さを教えてくれます。そこで、この機会に、皆さんの先輩に当たる 5 人の卒業生の活躍を紹介しましょう。

一人目は、皆さんもよく知っている 2015 年ノーベル物理学賞を受賞された梶田隆章先生。埼玉大学理学部を 1981 年に卒業し、東京大学大学院に進学、現在、東京大学宇宙線研究所の所長を務めておられます。私も学長として梶田先生のお話を伺うことが何度かありました。梶田先生は、「恐らく、本当に物理学の研究を志したのは大学院生の時であって、ものすごく幸運なことに良い師、良い仲間、良い研究プロジェクトに恵まれました。」と語っています。梶田先生の言葉の中の「出会い」には、ご自身、研究者人生の大きな転機となったとする、観測データとの出会いも含まれます。スーパーカミオカンデでの観測データに、計算値とのずれが生じていることに気付き、非常に重要に感じて、このデータを解明する研究に専念、ニュートリノ質量の発見につながったとのこと。そして、こう続けています。「いつ人生を決めるような、大切な出会いがあるか分かりません。広く目と心を開いて、大切なものに出会ったときのための準備をして下さい。」

二人目は、昨年 11 月に妖怪研究の業績で平成 28 年度文化功労者に選ばれた小松和彦先生。1970 年、埼玉大学教養学部のご卒業です。在学中に文化人類学という学問と良き師に衝撃的に出会い、埼大時代の後半には、埼玉県両神村でキツネつきや神隠しのエピソードに関する

フィールドワークを行って研究者の道を歩まれ、現在は国際日本文化研究センターの所長を務めておられます。今年1月に埼玉大学で講演頂いた際の演題が「謎解きという快樂に魅せられて-私の学問人生-」。「研究はつらくても、同時に楽しい謎解き。まずは、楽しむことを一番の柱にして頑張ってください。」と語っておられたことが印象的でした。そして、「埼玉大学に来なかったら今の研究はしていなかったかも知れません。チャンスを見つけ自分の道を切り開き、社会で活躍してほしい。」と、出会いの重要性に言及されています。

三人目は、1991年に埼玉大学理学部を卒業した塚田美樹さん。2016年ノーベル生理学・医学賞は、細胞内でタンパク質を分解し再利用するオートファジーの仕組みの解明で、東京工業大学名誉教授の大隅良典先生が受賞されましたが、受賞対象となった論文の一つに塚田さんが名を連ねていることはあまり知られていません。塚田さんは卒業研究で植物学に出会い、東京大学大学院に進学。当時、助教授であった大隅先生と出会い、研究指導を受けて、修士論文をまとめました。その研究では、何と38,000株もの酵母を調べ、オートファジーに関する重要な遺伝子15個を見出しています。そして、この研究成果は、大隅先生との共著論文として、1993年、国際学術誌に発表され、後に、ノーベル賞を受賞する主要論文の一つとなったのです。大隅先生は、塚田さんの研究上の貢献に大変感謝されており、今年2月のノーベル賞受賞記念祝賀会でも、塚田さんの名前と写真がスライドで紹介されていました。

四人目は、一昨日行われた埼玉大学大学院学位授与式で、博士の学位を取得したばかりの山木さやかさん。彼女は、113番目の新元素・ニホニウムを発見した、理化学研究所の森田浩介先生をリーダーとする研究チームの一員、検出器の調整とデータ解析を担当しています。「自分がチームに在籍中、新元素の3回目の合成を観測、さらに新元素の命名権獲得という出来事が起こりました。歴史的瞬間に遭遇できたことはとても幸運でした。」とは彼女の言。先日、東京でニホニウムの命名記念式典が行われましたが、理研チームに埼玉大学から4人の研究者が参加しており、私も埼玉大学長として招待され、出席してきました。113番元素のニホニウムは、30番の亜鉛を加速させ、83番のビスマスに衝突・融合させて検出されたとのこと。その難しさは、原子核の大きさが1兆分の1cmと小さく、ほとんど衝突しないこと、衝突しても融合する確率が100兆分の1と小さいこと、さらに寿命も1000分の2秒と短く、瞬く間にほかの元素になってしまうことだそうです。実験開始は2003年。2004年に1つ目、2005年に2つ目、そして2012年、遂に3つ目の113番元素の合成が、決定的な証拠の下に確認できたとのこと。実に9年間でたった3個、400兆回の衝突の結果です。

そして五人目は、昨日の新聞で報じられた、平成28年度の日本芸術院賞を受賞された根岸右司さん。1961年、埼玉大学教育学部のご卒業です。根岸さんは緻密な雪景色の油彩の名手で、大学時代に、後に芸術院会員となる故渡辺武夫先生に出会い、「郷土の偉大な芸術家の姿を目の当たりにしたことは人生の財産になった。」と仰っています。

皆さんと同じ埼玉大学同窓生の5人の方々の、様々な活躍を紹介しました。どれも出会いの大切さを教えてくれるエピソードです。皆さんの卒業という門出に、少しでも何かを感じてもらえればと思い、お話ししました。

ところで、先程のニホニウム発見チームは延べ48人で、2016年のベストチーム・オブ・ザ・イヤーを受賞しています。日本人は昔から、協調性に優れた国民だと言われますが、最近はいわゆる呼吸で培われた「空気を読むチーム」が通用しない場面が多くあります。一つには

グローバル化。日本だけでなく海外の人と一緒に働く機会が増えています。一つにはワークライフバランスの重要性。ライフステージに応じて個人の働き方はより多様化していく傾向にあります。このような中で一層必要とされるのは、個人ではなく、チームで仕事をするという視点です。チームの成果を最大化するには、一人一人が自分の役割の中でスキルを発揮する必要がありますが、協調性という名の下に、メンバーのスキルアップがなおざりにされていることがあります。チームという視点で新しい成果の生み出し方を再考することが重要です。一つの考え方として、チームワークのアウトプットには、チームとしての「効果」と「効率」だけでなく、チームで仕事をした時の個人としての満足感や学んだ気持ち、つまり「満足」と「学習」があるとするものがあります。ベストチーム・オブ・ザ・イヤーはこの4つ、すなわち効果、効率、満足、学習に注目して選考されているとのこと。 (ベストチーム・オブ・ザ・イヤー「チームワークとは」 <http://team-work.jp/team.html>)

チームと個人について、もう少し掘り下げて考えてみます。精神科医の斎藤環氏は「日本人のイメージする大人」と題した小論の中で次のように述べています（「学燈」, 丸善, 夏号, Vol.111, No.2, 2014年）。大人が第一にクリアすべき条件は、「経済的自立」と「自分自身の言動に責任が取れること」。これは、「大人」にとって社会的な必要条件の最低ラインです。大人がクリアすべき心理的条件は、二つのスキル。それは「待つ」と「伝える」。大人には、「世界の一部」と「世界の中心」という二つの意識を共存させるアイデンティティの確立が重要で、「待つ」ことは、自己主張を控え自分の欲望に待ったをかけて「世界の一部」としての自分に徹すること、「伝える」ことは、自分の欲望を適切に解放して「世界の中心」としての自分を尊重する態度とのこと。これは、先程のチームワークの4つのアウトプットに通じます。

とは言え、作家の橘 玲氏が「大人の選択」と題したエッセイ（「学燈」, 丸善, 夏号, Vol.111, No.2, 2014年）にて述べているように、私たちの抱える社会的問題を「チームで解決する」ことには、それが健全なコミュニティの理想であっても、手間も時間もかかり興味を失ってきているのも現実です。また、私たちの社会にどのような未来が待っているのかを予め知ることはできないですし、ときに、予想もしなかった大事件が起きて、社会の仕組みそのものを書き換えてしまうこともあります。

では、いったい、どのような社会、どのようなチームを形成すべきでしょうか。地球流体力学を専門とする京都大学教授の酒井敏氏によれば（「学燈」, 丸善, 冬号, Vol.113, No.4, 2016年）、「世の中は、基本的にカオスであり、天気予報と同じく、ある程度先になると全く予測不可能な、絶望的な話になる。だが、この絶望的な世界で、地球生命は35億年も生き続けていることを考えれば、カオスの世の中を生きていく秘訣はある。それは恐らく、スケール・フリー・ネットワーク、つまり基本的に極めて単純なローカルルールで決まるネットワークであろう。一見、無秩序で無駄だらけに見えるが、柔軟で、突発的な事故や予期せぬ変化に強いネットワーク。生物の神経回路や人間関係がこれに当たる。」とのこと。「所詮、人間社会は不完全な人間の集まり。そんな集団でも、ゆるい関係で社会を構成することで、次から次へと起こる、とんでもない事態に対処する柔軟性が生まれる。厳密なルールで統治しようとするれば、予期せぬ事態には対応できない。現代のわれわれに足りないのは、「ゆるさ」ではないだろうか。」としています。

今は「知識社会」。将来の予測が難しく社会イノベーションが必要な状況にあって、それを打破するため知恵を結集しなくてはなりません。しかも、周囲の環境が刻々と変わり、「答のない問題」に対しての解は分野横断的、かつ多様であって、成果を得るには多様な専門家の協力、チームワークが不可欠です。皆さんにはこれから、チームの中の一個人として、この役割を担うことが期待されることになります。

知識社会では、個人としても、幅広い知識だけでなく、柔軟な思考力に基づく判断が一層重要となり、知識は課題を解決しようとする思考と行動に結びついた時に初めて意味を持ちます。つまり、ゲーテの言葉のとおり、“**Knowing is not enough; we must apply. Willing is not enough; we must do.**”「知るだけでは不十分、知の活用が必要。意思だけでは不十分、実行が必要である。」のです。

実は、ゲーテは思考に関連してもう一つ、言葉を残しています。それは、“**Thinking is more interesting than knowing, but less interesting than looking.**”「考える事は知ることよりおもしろい。しかし、見ることには及ばない。」思考以上に「見ること」の重要性について言及しています。ただ、ゲーテは同時に、“**We only see what we know.**”「われわれは知っている物しか目に入らない。」とも言っており、「見ること」の難しさも指摘しています。見えるものを感覚でとらえる時、自分のフィルターがかかっており、目の前に見えているのに見えない、自分が見たいものだけを見てしまいます。

これからは、感覚を開いてものを見るとともに、考えること、見ることの幅を拡げ、多様性を柔軟に受容するよう努め、知識社会に貢献する人材、すなわち知のプロフェッショナルになって下さい。皆さんが、「ゆるさ」を理解した知のプロフェッショナルとなり、知識社会で活躍されんことを大いに期待しています。埼玉大学は、これからも、「埼玉大学 **All in One Campus at 首都圏埼玉 ～多様性と融合の具現化～**」というビジョンの下、皆さんを有形、無形にサポートします。そして、同窓生としての皆さんそれぞれの活躍を、何よりの財産として、埼玉大学はより一層輝いていきます。

最後に、皆さんが、これからも多様な人々、多様なものごとと出会い、触発され、幸運にも恵まれてさらに成長し、それぞれに節目の点を結んで作る人生が充実したものとなることを祈念して、私の式辞とします。

平成 29 年 3 月 24 日

埼玉大学長 山口宏樹